神奈川県立歴史博物館
Kanagawa Prefectural Museum of Cultural History

論題	間口洞窟遺跡出土の貝刃 ―弥生時代における貝刃の存在例について―
著者	神沢勇一・川口徳治朗
掲載誌	神奈川県立博物館研究報告　第 5 号
ISSN	0910-9730
刊行年月	1972 年（昭和 47 年）3 月
判型	JIS-B5（182mm × 257mm）

間口洞窟遺跡出土の貝刃

—— 弥生時代における貝刃の存在例について ——

On the Shell Blades of Yayoi Age found at Makuchi Site in Miura City, Kanagawa pref., Japan.

神　沢　勇　一・川　口　徳　治　朗

Yūichi Kanzawa ・ Tokujirō Kawaguchi

1

貝刃は二枚貝の腹縁に剥離を加えて刃を付けた利器である。その存在が注意され始めたのは比較的最近のことであるが，主として関東地方，東北地方の縄文時代貝塚から既に多くの出土例が報告されており，一般に縄文時代のほぼ全期間にわたって製作，使用されたと考えられている。

ところが，1971年3月と8月に，本館で三浦市南下浦町松輪に存在する間口洞窟遺跡を発掘調査したさい，弥生時代中期および後期の文化層から，21例の貝刃が出土した。それらは，形態・製作技法・使用痕等において，すべて縄文時代の貝刃と基本的特長を同じくするものであり，弥生時代にも貝刃の製作，使用が行なわれたことが明らかになったので，ここに概要を報告し，あわせて二，三の所見を述べることにした。

2

最初に遺跡と貝刃の出土状態について，簡単に説明しておきたい。

間口遺跡は三浦半島沿岸に点在する海蝕洞窟遺跡のひとつで，三浦半島南端部の東側，東京湾口に面した間口湾と呼ばれるちいさな湾の奥に存在する。洞窟の規模は入口幅約5m，同・高さ5m，奥行約8mで，ローム質黄褐色土層の上に弥生時代の混貝灰層があり，さらに落磐による岩塊層をはさんで，ほとんど貝を含まない古墳時代の灰層が堆積している（図版1—上）。

弥生時代の混貝灰層は厚さ90～120cmで，下部から宮ノ台式土器，中部から久ガ原式土器が出土し，上部では久ガ原式土器と弥生町式土器が混出する。この灰層は多量の貝を含み，部分的には貝塚にちかい。貝はイシダタミが60～70%を占め，ほかはベンケイガイ，ウチムラサキ，ハマグリ，チョウセンハマグリ，オキシジミ，アワビ，バテイラなどが，やや目だつ程度である。魚骨の量もかなり多い。遺物では，銛・離頭銛・鏃・尖頭器・釣

針など主として漁撈に関係した骨角器，貝刃・貝輪・貝庖丁などの貝製品，礫器その他が出土している。

間口洞窟遺跡における遺跡の状態と遺物の傾向は，三浦半島に存在する他の洞窟遺跡の場合と全く同じで，既に指摘されているように，洞窟居住者の生活が魚貝類の捕獲に依存するところが多く，また，異常に厚い灰層は製塩が行なわれた可能性があることを示すと考えられる。

貝刃は混貝灰層下端，下部，上部および弥生時代以後の埋葬その他による攪乱部から出土したが，攪乱部出土例は別としても，各部の境界が明瞭でないため，出土層位と伴出土器の型式から時期を確認できる例が少ない。資料総数もそれらを含めて21例にすぎないので，本稿では弥生時代においても貝刃が製作，使用された事実の報告に重点を置き，一括して扱うことにする。なお，記述の都合上，貝刃の各部分はP.5の図の名称で表示し，殻の種別については，腹縁を手前にして伏せたとき前背縁が右側になるものをR，左側になるものをLの記号で示すことにしたい。本文中の資料番号は，挿図，図版中の番号と共通である。(注1)

3

資料21例のうち，完形品および器形を察知し得るものは17例である。

素材の種類はハマグリ＝17例，オキシジミ＝3例，ミルクイ＝1例で，各種類とも中型ないし大型の殻が使用されている。(注2) この場合，貝そのものの大きさと形状の差が大きく，製品の形態に影響や制約を与える度合いが多いと考えられ，したがって，資料を一律の規準で分類することには問題がない訳ではないが，一応，機能と直接関係する刃の位置，刃幅の広狭によって形態を区分すると，4群に大別できる。また，刃については，すべて殻の内側から押圧剥離を加えて付けられており，製作技法の差で，5種類に区分することができる。

形態の識別が不可能な破片4例を除いた17例の形態別は，次のとおりである。

1　群＝3例。　No.1，2，3＜第1図—1～3，図版2—1～3，図版4—(1)＞

腹縁の一端に幅の狭い刃を付けたもの。

No.3は両端に刃があるが，左側の刃だけに使用痕（磨滅，擦痕）が認められ，右側の刃には全く使用の形跡がないので，使用状態を考慮して本群に分類した。おそらく意図どおりの刃が得られなかったため，付け直したものであろう。

3例ともハマグリ製で，殻の種別個数はR＝2例（No.2，3）・L＝1例（No.1）である。刃は腹縁に数回の剥離を連続的に加えただけで付けており，角度，間隔とも不規則的な剥離による不揃いな刃（No.2，3）と，ほぼ規則的な剥離による整った刃(No.1）とがある。刃先はいずれも厚い。

2　群＝2例。　No.10，11＜第1図—10，11，図版2—10，11＞

腹縁の一端から，ほぼ中央まで刃を付けたもの。刃の幅が1群よりも広い。

2例ともハマグリ製で，殻の種別はRである。刃は腹縁に不規則的な剥離を連続的に加え（1次加工），さらに，こまかい規則的な剥離を重ねて（2次加工）付けている。刃先は薄く，鋭い。

3　群＝9例。No.6，7，8，9，13，14，16，17，18<第1図—6～9，第2図—13，14，16～18，図版2—13，図版3—6，14，16～18，図版4—(20)，(22)>

腹縁のほとんど全体におよぶ，幅の広い刃を付けたもの。

ハマグリ製5例，オキシジミ製3例，ミルクイ製1例。殻の種別個数は，ハマグリではR＝3例（No.13，14，18）・L＝2例（No.16，17），オキシジミではR＝1例（No.9）・L＝2例（No.16，17），ミルクイはR＝1例（No.6）である。

本群では刃の型式にややバラエティが認められる。

ミルクイ製とオキシジミ製の貝刃は，腹縁に角度，間隔とも不規則的な剥離を連続的に加えただけで刃を付けている。前者にみられる剥離はかなり大きいが，本質的には後者のそれと異ならない。ハマグリ製の場合は，腹縁に角度，間隔とも不規則的な剥離を連続的に加え（1次加工），さらに，こまかい不規則的な剥離を重ねて刃を付けたもの（No.13，14，17，18）と，2次加工においては規則的な剥離を加えたもの（No.16）とがある。なお，No.18は1次加工の剥離が異常に深く入ったため，刃部の奥行が著しく延びている（同様な刃部の状態はNo.19の破片にも認められる）。

3群においては，貝の種類によって，刃の製作技法が異なると言う傾向を示す点が注意される。

4　群＝3例。No.5，20，21<第1図—5，第2図—20，21，図版4—5，20，21>

大きな打欠きを加えて，殻の両端と腹縁を除去し，割れ口の部分に刃を付けたもの。

3例ともハマグリ製で，殻の種別個数はR＝1例（No.5）・L＝2例（No.20，21）である。殻頂に近い部分だけを使用しているので，小型の殻に加工したかのような感じをもつが，少なくとも5×6cm前後の殻を素材にしたと推定される。

刃は，No.5の場合は角度，間隔とも不規則的な剥離を連続的に加えただけで付けているが，No.20，21では前者と同様な剥離を加え（1次加工），さらに，こまかい不規則的な剥離を重ねて（2次加工）刃を付けている。本群の刃部は，他の3群と著しく異なり，刃先もきわめて粗く，鈍い。

貝刃の部分名

破片について

No.4，12，15，19<第1図—4，第2図—12，15，19>の破片4例は，いずれもハマグリ製の貝刃である。小破片のため形態を識別しがたいが，No.19は腹縁中央部の破片で，現存部分の形状から，3群に属すると考えて誤りないであろう。

刃の製作技法については，既に各群の説明の中で述べたが，それらを要約すると，刃は1回の剥離だけで付ける場合と2回の剥離（1次加工，2次加工）で付ける場合とに大別でき，さらに，剥離の角度と間隔の規則性の組み合わせによって，5型式（a型～e型）に細分される。

a型……不規則的な剥離を，連続的に1回加えただけで刃を付けたもの。

b型……規則的な剥離を，連続的に1回加えただけで刃を付けたもの。

c型……不規則的な剥離を連続的に加えて1次加工を行ない，2次加工で，こまかい不規則的な剥離を加えて刃を付けたもの。

d型……不規則的な剥離を連続的に加えて1次加工を行ない，2次加工で，こまかい規則的な剥離を加えて刃を付けたもの。

e型……規則的な剥離を連続的に加えて1次加工を行ない，2次加工で，こまかい規則的な剥離を加えて刃を付けたもの。

各例における刃の型式別は表1，各形態における刃の型式別は表2のとおりである。

剥離の方向は第1図，第2図に矢印で示した。資料の絶対数が少ないため確実とは言えないが，これらの貝刃に関する限りでは，殻の種別と剥離の方向の間に特別な関係はないらしい。ただ，剥離の方向については，c型，d型およびe型に属する10例の場合，No.14をのぞき，1次加工と2次加工の方向が逆（往復する状態）になるという，著しい傾向が認められる。10例の貝刃が，すべてハマグリ製であることとも，関係があるかも知れない。

そのほかでは，ハマグリ製貝刃のうち，刃の幅が1群よりも広いc型，d型およびe型の貝刃には，2回の剝離で刃を付けていること，オキシジミ製とミルクイ製の貝刃は1回の剝離だけで刃を付けていることなどが注意される。

刃こぼれ，磨滅，擦痕など，明らかに使用の結果生じたと考えられる損耗は，多少の差はあっても，大部分の資料に認められる。

刃こぼれは，幅1～3㎜程度が普通で，No.11，13，17，18など，刃先が比較的薄手の貝刃に著しいが，幅1㎝以上にわたって刃先が大きく欠け落ちる場合もみられる（No.11の腹縁左端，No.18の腹縁右端など）。

磨滅は主として刃部と周辺に認められ，刃先や刃の後縁の角がとれて，丸味を帯びている例が少なくない。No.3，8＜図版4－(8)＞，11，16＜図版4－16＞，17などの刃部ではかなり目立ち，また，ミルクイ製の貝刃では，刃の上方の器面にも著しい。

擦痕は幅0.1～0.3㎜，長さ3～5㎜程度のものが多く，刃先から刃の後縁に続く背面に残っており，しばしば数条が並行している。走向は刃に対して直角，右傾あるいは左傾し，一定しないが，いずれかと言えば右傾する傾向がある（No.17＜図版4－(17)＞，2，3，11）。No.14の殻頂付近から背面中央には，幅0.5～1㎜の粗い擦痕が無数に残っている。長さも，1～2㎝あり，曲線を描くものが少なからず認められる。一般の擦痕にくらべて

形状が相当異なるが，使用の結果生じたものであることは明らかである。

4

間口洞窟遺跡出土の貝刃は，器形，刃の形状，器面の損耗状態――特に刃と周辺に著しい，磨滅や擦痕――から，掻器として存在したとみなすことができよう。

しかし，これらの資料では，既に3項で述べたように，形態と刃の型式，形態と素材に使用した貝の種類，貝の種類と製作技法などに特定の組み合わせや，目立った傾向が認められるが，貝刃の在り方や系統を，直接知ることができない。

ここで問題になるのは，多くの点で酷似する縄文時代の貝刃との関係である。

われわれは，さきに東京湾沿岸地域から出土した縄文時代の貝刃の検討を試み，貝刃の形態と製作技法から，4群8類に分類した。この場合の資料は早期なかばから後期までのものを含むが，中期の資料が多く，晩期に属する例はない。(注3) したがって，比較資料にするには適当ではないが，一応の目安をつける意味で，間口洞窟遺跡出土例と比較すると，(1)形態については，間口洞窟遺跡出土例の1群は縄文時代例のⅠ群a類に，2群はⅠ群b類に，3群はⅡ群b類に，4群中 No. 5，No.20はⅢ群b類に，No. 21はⅢ群c類に相当する。(2)刃の製作技法については，間口洞窟遺跡出土例のa型は縄文時代例のA型に，b型はB型に，c型はC型に，d型はD型に，e型はF型に相当する。

相当する形態ならびに刃の型式は，いずれの場合も基本的特長において，予想以上の一致を示している。

形態，刃の型式，貝の種類などの組み合わせにも，同様な傾向が少なからず認められる。縄文時代例と間口洞窟遺跡例の主体をなすものが同形態のⅡ群b類（539例中，331例）と3群（21例中，9例）であること，いずれにおいても，ハマグリが貝刃の素材の大半を占めている（縄文時代例では539例中，331例。間口洞窟遺跡例では21例中，17例）ことなどが注意される。なお，あとの数字から，素材の選択傾向が同じであることが知られるが，間口洞窟遺跡においてはハマグリの出土量はかなり少なく，特に，貝刃の素材になり得るものは限られている。ウチムラサキ，ベンケイガイなど，同程度の大きさの貝の量は比較的多いにもかかわらず，ハマグリをもっぱら選んでいることは，単に加工の容易さだけによるものとは考えがたく，生活上における特別な必要性や伝統の存在を考慮に入れる余地があろう。

東日本の弥生文化が各地域の縄文文化を基盤に成立している事情や，貝刃を盛んに製作，使用した縄文時代人の生活と海蝕洞窟の居住者の生活が，ともに漁撈に依存する度合いが大きかったことなどからみて，間口洞窟遺跡出土の貝刃は，縄文時代の貝刃の系統をひいている可能性が多いと思われる。

注

(1) 赤星直忠　「海蝕洞窟」　神奈川県文化財調査報告　20集　1953年

(2) ハマグリとチョウセンハマグリは区別すべきものであるが，貝刃に加工された場合の加工程度や，破片の場合は識別しがたいため，本稿では両者を含めた広い意味に使用している。

(3) 神沢勇一・川口徳治朗　「東京湾沿岸地域出土の貝刃について」　神奈川県立博物館研究報告　第1巻　第4号　1971年

表　1

No.	貝・殻の種別	形態(群別)	刃の型式	備考 寸法 mm	備考 出土位置
1	ハマグリ(L)	1	a	73 × 90	混貝灰層上部
2	ハマグリ(R)	1	a	66 × 81	〃
3	ハマグリ(R)	1	a	53 × 61	混貝灰層下部
4	ハマグリ(R)	(不明)	a	(27 × 47)	混貝灰層下端
5	ハマグリ(L)	4	a	35 × 36	混貝灰層上部
6	ミルクイ(R)	3	a	103 × 140	〃
7	オキシジミ(L)	3	a	40 × 38	混貝灰層下部
8	オキシジミ(L)	3	a	53 × 49	〃
9	オキシジミ(R)	3	a	55 × 49	攪乱部(下部)
10	ハマグリ(R)	2	d	55 × 69	混貝灰層上部
11	ハマグリ(R)	2	d	56 × 67	混貝灰層下端
12	ハマグリ(不明)	(不明)	c	(23 × 41)	混貝灰層下部
13	ハマグリ(R)	3	c	65 × 78	混貝灰層上部
14	ハマグリ(R)	3	c	53 × 69	混貝灰層下部
15	ハマグリ(R)	(不明)	b	(44 × 23)	混貝灰層上部
16	ハマグリ(L)	3	e	50 × 64	混貝灰層下端
17	ハマグリ(L)	3	c	64 × 74	混貝灰層上部
18	ハマグリ(R)	3	c	63 × (78)	混貝灰層下部
19	ハマグリ(不明)	(不明)	c	(35 × 48)	混貝灰層上部
20	ハマグリ(L)	4	a	31 × 39	混貝灰層下部
21	ハマグリ(L)	4	c	33 × 49	〃

表　2

形態＼刃の型式	a	b	c	d	e	貝刃の形態別個数
1　群	2	1	0	0	0	3
2　群	0	0	0	2	0	2
3　群	4	0	4	0	1	9
4　群	2	0	1	0	0	3
不　明	1	1	2	0	0	4
刃の型式別個数	9	2	7	2	1	21
備　考	1回の剝離だけで付けた刃		2回の剝離を加えて付けた刃（2次加工）			

第1図　貝刃実測図　・形態別

←―― 1 次剝離
←―― 2 次剝離

1群＝1，2，3　3群＝6，7，8，9　4群＝5　不明＝4

第2図　貝刃実測図　・形態別

←——1 次剝離　　2群＝10, 11　　3群＝13, 14, 16, 17, 18　　4群＝20, 21
←——2 次剝離　　不明＝12, 15, 19

遺物包含層断面

貝刃出土状態（資料No. 5，上部混貝灰層）

図版 1

1　（1群）　73×90㎜

2　（1群）　66×81㎜

3　（1群）　53×61㎜

10　（2群）　55×69㎜

13　（3群）　65×78㎜

11　（2群）　56×67㎜

図　版　2　　1群，2群，3群

〔刃の型式〕　1・2・3＝a型　　10・11＝b型　　13＝c型

17　（3群）　64×74㎜

14　（3群）　53×69㎜

16　（3群）　50×64㎜

18　（3群）　63×(78)㎜

6　（3群）　103×140㎜

図版 3　　3群

〔刃の型式〕　6＝a型　14・17・18＝c型　16＝e型

5　（4群）　35×36㎜

9　（3群）　55×49㎜

20　（4群）　31×39㎜

8　（3群）　53×49㎜

21　（4群）　33×49㎜

7　（3群）　40×38㎜

（17）

（8）

（16）

（1）

図　版　4　　3群、4群、刃の状態（拡大）

〔刃の型式〕　7・8・9＝a型　（1）＝b型

5・20・21・(17)＝c型　(16)＝e型